

# 造船資料保存委員会活動の紹介と事例

正会員 藤村 洋\*      正会員 黒井 昌明\*  
正会員 木村 文興\*

Activities of the Committee for Preserving Shipbuilding Heritage  
by Hiroshi Fujimura, Member      Masaaki Kuroi, Member  
Fumioki Kimura, Member

**Key Words** : Preserving Shipbuilding Heritage, Virtual Maritime Museum

## 1. 緒 言

造船資料保存委員会は2007年春、関西支部の高齢会員のグループ、Kシニアメンバーの発意により誕生し、10月関西支部細則12条による臨時委員会として承認され学会の活動としてスタートした。所定の3年が経過した後、2011年春の支部総会で細則13条による委員会（研究会）として永続的な活動の継続が認められた。発足以来約8年が経過したが、途中2009年総会で活動紹介を行い、ほかにKANRIN20号（2008/9）でも報告をした。今回は現時点での蓄積の状況、主な活動実績並びに委員会運営の実態を事例をもって紹介する。併せて、保存活動並びに歴史研究の必要性について提言し、そのための方策検討の参考となる事項を8年の経験に基づき申し述べる。

## 2. 活動の趣意と位置付け

ホームページ「デジタル造船資料館」冒頭に掲げた活動の趣意はつぎの通りである。

『我が国現代の造船技術は幕末・明治期に欧米方式を導入してスタートして以来先人の叡智と努力により著しい進歩と様々な変遷を遂げてきた。特に近年は周辺技術の進歩にしたがって急速に変化し、とりわけ電子計算機の発展により劇的な変化を遂げている。あらゆる工程が従来の手作業を中心とした手法から電子計算機による手法に移行し、使用されなくなった在来手法、用具類は忘れ去られる危機に瀕している。理論分野については各種論文集や出版物により記録保存がなされ将来とも検索が可能な状態にあると考えてよいが、特に設計、工作、試運転などの実際に船を作り上げる実務段階の手法、用具類は急速に失われようとしている。

これらの変遷の状況を記録に残し、かつ用具・原図などについて実物を保存することは技術史、文化史的観点から極めて有益であると考えられる。またある意味ではその変遷を身をもって経験してきた世代の義務であるとも思われる。すでに遅いかもしれないが、散逸、滅失してしまう前に、また経験した当事者が健在な間に、この作業を行い後世に引き継ぐ決意をしたものである。

既に一部の事物については個別企業のPRの一環として収集され一般向けに展示されているものもあるが、造船技術全般について客観的かつ系統的な保存活動は行わ

れていないように思われる。

斯かる情況に鑑み、日本船舶海洋工学会関西支部では、このような活動も学会活動の一環であるとの認識に立ち保存に関する委員会を設置して学問的見地から保存活動を開始することになった。』

上記趣意に基づいて活動を開始し現在に至っている。この委員会の活動の対象とする事物の年代はおよそ幕末・明治初期の近代造船技術伝来以降現代に至る範囲を考えている。すなわち、この道の先達として早くから活動している日本海事史学会のカバーする古代から幕末までの期間の事物はこの委員会の対象とはしていない。この委員会は、関西支部の「研究会」の一つとして設置されているが、実際の作業は神戸大学海事科学研究科の深江キャンパス（神戸市東灘区所在）で、海事博物館特別専門員造船グループという位置づけで行っている。収集品もこの建物内に収容している。作業スペース、什器備品、回線などは神戸大学側で準備されている。このことは海事科学研究科長と関西支部長、海事博物館長と保存委員会委員長間で2011年1月7日取り交わした「海事資料保存活動に関する協力協定」により定められている。

## 3. 現在までの収集の実態

当初の寄贈は、主として会員会社からで、任務を終えた計測器、計算機など。引き続いて個人会員から製図小道具、個人的に収集した造船・海事に関わる記念品など。次に書籍類、これは規模内容様々であるが、いわゆる文庫と称してよい大きな寄贈品もある。大口寄贈の例は次の通りである。

- 1) 工業高校造船科の廃止に伴い、教材として保有していた製図用具、工具、各種サンプル、模型、教科書などを一括して寄付
- 2) 大学の建物増築にともない造船教室が保有していた古い資料、模型、計測器具、参考書籍などを寄付
- 3) 地方の小造船所が廃業に伴い、建造船の図面を一括して寄付
- 4) 個人の収集家の集めた書籍、図面、絵葉書、画像、地図、カタログなど各種の収集品

寄贈の実態を数字的に見ると下図の通りである。

Table 1 Result of Donation

寄贈者の数(個人・企業・学校など)	98
寄贈受入回数(LOT数)	213
寄贈品受入番号件数	9,326
寄贈品数量	18,390

\* 日本船舶海洋工学会関西支部 造船資料保存委員会

Table 2 Major Donations

順位	寄贈者名	寄贈回数	寄贈件数	寄贈品点数
1	南波喜久子 様	3	1,614	4,433
2	泉江三 様	15	2,001	4,186
3	武藤碩夫 様	9	978	1,774
4	東京大学工学系研究科	1	471	1,087
5	広島県立大崎海星高校	1	720	891
6	渡邊俊夫 様	3	477	589
7	岡本 洋 様	3	73	501
8	赤星光雄 様	4	184	441
9	木村文興 様	10	89	381
10	増井造船所	1	124	357

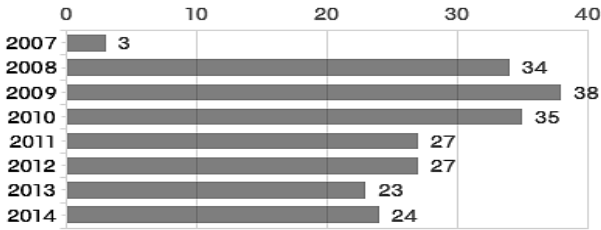


Fig.1 Number of Donation per Year

#### 4. 寄贈の経緯

寄贈を申し込むに至る経過は下記のように様々である。

- 1) 学会の協力依頼に対する応答
- 2) KANRIN の活動報告などを読んで
- 3) 当委員会からの直接お願いに応じて
- 4) 展示を見て
- 5) ホームページを見て
- 6) くちコミまたは紹介されて

活動開始当初は 1) ~ 3) が多かったが展示、HP 開設など当方の情報発信活動活発化に伴い 4) ~ 6) が増えてきた。特に 5) は企業からの問い合わせの結果寄贈に至ったケースが数件ある (例 Fig.2, Fig.3)。当方の発信の重要性が判った。

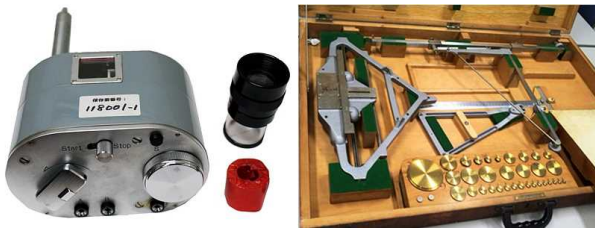


Fig.2 ASKANIA Vibration Recorder Fig.3 Harmonic Analyzer

#### 5. どんな寄贈品があるか

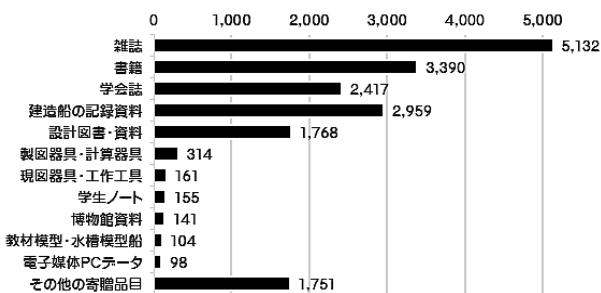


Fig.4 Kind of Objects and their Number

#### 6. 貴重な寄贈品の例

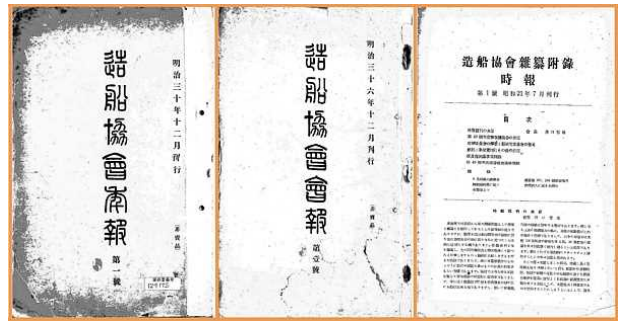


Fig.5 The First Bulletin of the Society

The first Publication after the World War II



Fig.6 The first Edition of "FUNE NO KAGAKU"



Fig.7 The first "SENPAKU" after the World War II



Fig.8 Model of the "Waveless Hull Form" and "KURENAI - MARU"

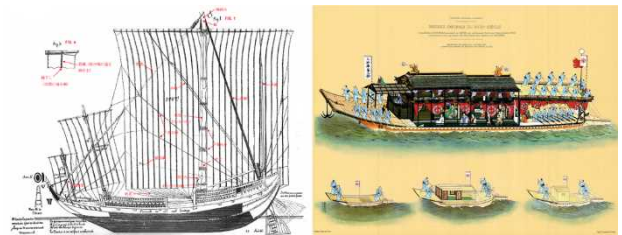


Fig.9 Figures on A.Paris's "SOUVENIRS DE MARINE"

#### 7. 発表の方法と社会貢献の例

收藏品 (1次資料) とその調査結果 (1.5次資料) の外部への発表は次の方法によっている。

展示会:

- 第1回: 2009年7月17日開幕,  
「広島県立大崎海星高校・旧木江工業高校造船科の軌跡」
- 第2回: 2010年9月15日開幕,  
「波なし船型の研究とくれない丸における大型球状船首の実船試験」
- 第3回: 2011年7月15日開幕,  
「"船の美" ご紹介」

第4回：2013年7月12日開幕の海事博物館企画展  
「進水式絵葉書にみる船の変遷」に協力  
ホームページ：  
「デジタル造船資料館」は2008年9月15日開設，1日あたりの訪問者は約60人，閲覧ページ数は約200ページである。



Fig.10 The Committee's Home Page

「デジタル造船資料館」の内容は下記．

- ・委員会の紹介
- ・保存資料閲覧  
分類毎に収蔵品の画像，簡単な解説が見られる
- ・論説・随想  
例：「初山模型の魅力」－創業100年父子二代で生み出した珠玉の艦船模型  
「真空管」に想う－懐かしさと憧れと哀しさ  
水槽試験と計算機の今昔
- ・活動報告・調査報告  
例：造船資料保存委員会 保存書籍リスト  
工業高校における造船教育の軌跡  
船型の研究・開発 歴史年表
- ・投稿  
例：品質管理の勲章デミング賞に挑戦した造船所
- ・催し案内
- ・リンク  
例：船舶工学関係 論文・研究文献  
全国工業高等学校造船教育研究会会誌  
例に見るとく，収蔵品の紹介，活動報告などの発信のほか論文文献などにアクセスしやすいリンクをもうけるなど“皆様の便利帳”機能も載せている。

海事博物館研究年報：



Fig.11 Annual Report of Maritime Museum of Kobe University

2010年版 (No.38) P51～67  
「造船資料保存活動の報告」造船資料保存グループ

2013年版 (No.41) P6～27  
「進水絵葉書にみる船の変遷」藤村洋  
「我が国の進水記念絵葉書－その誕生と特徴－」  
「進水記念絵葉書に見る船の変遷－ドライ貨物船と客船・貨客船－」碓崎貞雄  
「進水絵葉書に見るタンカーの進化」石津康二  
シンポジウム：  
2010年11月5日 深江キャンパス交流棟にて，第2回展示に関連して関西支部研究委員会とKシニア共催によるシンポジウム「船型開発のあけぼの」開催．講演者は埴友雄，岡本洋，藤村洋の3名．

## 8. 社会貢献

工業高校造船教育研究会への応援：

第1回展示で報告した全国工業高校造船教育研究会は造船科を持つ学校数が3校に減っているにもかかわらず継続して運営されている．報告が毎年1回発行の「会誌」に掲載されている．この「会誌」を多くの人に知って貰うために，今までの全号に加え毎号発行毎に送付を受け「デジタル造船資料館」に掲載している．

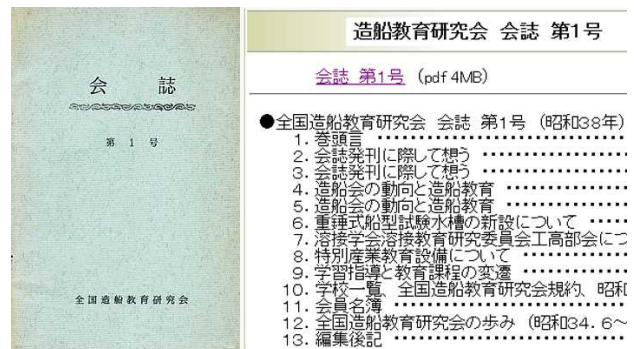


Fig.12 Annual Report No.1 of

the Conference for Shipbuilding Education in High School  
神戸市民セミナー支援：  
海事博物館が行った第7回神戸市民に対する海事関連セミナーに出講，下記レクチャーを行った．  
2013年10月5日  
「我が国の進水記念絵葉書」碓崎  
2013年10月12日  
「進水絵葉書にみる船の変遷」碓崎・石津・藤村  
外部支援者との共同作業：  
「デジタル造船資料館」を見た外部支援者からフランス語資料の翻訳支援を受けた．爾後協力して調査報告として発表した．

## 9. 活動の体制とインフラ

委員会の対外的基本姿勢 (Museum Policy)

保存活動は第3者から事象を取得し，保管，展示などの行為を行う．これには法的な注意が必要である．保存委では，このような法的配慮について先進国である英国の博物館の Museum Policy，我が国の著作権法などを学び基本方針を決め，逐次支部運営委員会に報告，修正意見を折り込んだものに従って運営を行っている．主な事項は下記の通りである．

取得：

原則として寄付として受け入れる．所有権に問題ないことを確認する．申し出によっては寄託とする．すべて書類を交換し確認する．職務上所持した物の寄付につい



ては職を離れてからの年月、物の価値を考慮するなど慎重な配慮を加える。

#### 保管と廃棄:

最終的には神戸大学海事博物館に収容する。貸し出しは行わない。廃棄は原則として保存委の判断による。

#### 公開:

HP または展示による公開を原則とする。ただし委員会が公開に適さないと判断した物は除く。公開したものを許可なく複写、撮影することを禁じる。

著作権がある物の複写については著作権法第 31, 32 条により判断する。

#### 図面の扱い:

著作権法に準じて判断する。船の引渡をもって公開されたと見なす。

#### HP 上の著作権の考え方:

米国などで一般化している "Fair Use" の考えに準ずると記載、個別に著作権者の許可は求めない、意見があれば申し出て欲しいと断り書きを掲載している。

以上の原則は、書面または HP に明記するなどの方法により寄附者、権利者に知らせている。

#### 寄贈品の格納:

寄贈の申し入れを受けた場合、次に処置すべきことは運搬と格納である。運搬は費用当方持ちで、大量の場合は専門業者に少量の場合は "赤帽" などの簡易業者に依頼、さらに近隣であれば委員がマイカーで運ぶ。

格納場所は、最終的には海事博物館、整理段階は博物館の収蔵場所をシェアしている保存委管理下の下記スペースにおく。

プレハブ倉庫 2 カ所

移動ラック 数カ所

作業室内ロッカー数カ所

必ずしも十分なスペースとは言えないので、近い将来収蔵品の選別廃棄を行わなくてはならないと思われる。

書籍のうち纏まった希少本は海事博物館の判断により大学図書館の海事分館に移管する。寄贈者の希望により

文庫としてリストの上では纏まった形を取り、外部者のアクセスしやすいように配慮している。

#### 収蔵品の整理と調査:

収蔵品には、寄附を受け入れた時にロットごとに追い番を割り当てる方式で「保存委番号」という管理番号を付ける。部品が別れているときはサブナンバーを付ける。例: 231015-0001

231: ロット番号 015: 追い番 -0001: サブ No

ロットは寄附者 / 寄附回数ごとに当初から追い番で付けてあるので誰が何時寄附した物品かわかる。

この番号毎に、寄附者、受入年月日、受入担当者、品名、収納場所、調査完了日などをリストアップしてある。これを書式 5 と呼んでいる。これがいわば全収蔵品の戸籍簿であり、最も重要な管理リストである。寄附を受けた場合、受入窓口になった者が受入報告をデータベース担当者に送る。これ以降書式 5 として登録されるまでが入口管理であり最も重要なアクションである。

現物にはこの番号をラベル、札などで貼り付け管理上のキーとする。

次に対象品の属性調査、いわば学芸員としての調査を行う。寸法、材質、用途、製作者、資料の内容、書籍の梗概、著者など多岐に亘る属性を調べ記録する。形態などは写真撮影により記録、すべて番号で照合出来るよう

に工夫した属性調査表に記入する。書籍、資料、図面など紙資料の記録にはスキャナが欠かせない。最近、本を見開きのままでスキャン出来るたて型スキャナを購入し利用している。

これらのドキュメントは Excel データで記録しメーリングリストでデータベース担当者に送りデータベースソフト "Access" に収め込む。一連の作業を Documentation System として構成してある。メーリングリストとファイルサーバーは外部ウェブサービスを利用している。

## 10. 関係施設の支援

### アムテック史料館:

JMU アムテックには旧播磨造船所時代からの歴史資料が残っており、これをアムテック史料館に展示している。保存委はアムテック出身委員 2 を通じてこの史料館と協力関係を持っている。技術協力、資料の交換、情報交換が主である。

### 舞鶴館:

JMU 舞鶴造船所には旧海軍工廠時代からの資料を収納、展示している舞鶴館がある。保存委はこことも協力関係を持っている。同所現役社員 1 名が保存委員会委員として加わっており、HP「舞鶴館」は当委員会 HP「デジタル造船資料館」から「提携先のホムページ」としてリンクで見られるようにしてある。

## 11. 委員会の構成

現在の委員総数はアドバイザー 2 名を除いて 28 名で、構成は下記の通り。

区分別: 各社 0B 24, 自営 2, 教職 0B 1, 教職 1  
分野別: 造船 25, 機関 2, 電気 1  
居所別: 兵庫県 16, 大阪府 8, 奈良 1, 玉野 1,  
下関 1, 舞鶴 1

## 12. 8 年間の経験からの提言

最近の博物館、図書館、資料館などはデジタル・アーカイブ化による知的創造物共有化の方向に動いている。他方、企業は激しい競争の中で知的財産囲い込みを強化している。保存活動はこの二つの傾向の狭間にある。両者を成り立たせるためには非公開の年限を定めるなど "方針" が必要である。さらに、デジタル媒体による保存・公開には新しい知識に基づく工夫が必要である。これは、知的創造活動の主体である学会が検討すべき課題ではないか。

一方、具体的な収集活動は複数の窓口を設けて取り組むことが望ましい。統一された方式の下に、各支部に保存委員会を置くことが具体策として考えられる。

## 謝 辞

この報告を述べるに当たり活動を支援された下記の方々に厚く御礼申し上げる。

様々な物品を頂戴した寄贈者各位、神戸大学大学院海事科学研究科ならびに海事博物館関係者各位、関西支部 K シニア関係者および造船資料保存委員会各位

## 参考文献

神戸大学大学院海事科学研究科 海事博物館研究年報  
[No.38 \(2010\) および](#) [No.41 \(2013\)](#)